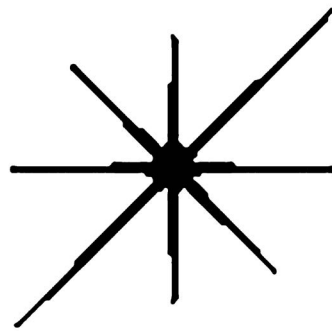


コメット通信 61

[’25 年 8 月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

偶成記

——夕暮れまでの喫茶店（２）

中村邦生

メモリアル、森からどこへ？

あるシュールリアリズム詩人の登場

今日は、G 駅近くのコメダ珈琲店にいる。仕事の打ち合わせ以外、一人でチェーン店に行くことはあまりないが、この店の「コメ黒」という苦みと酸味のバランスの良い特製のブレンド・コーヒーは気に入っている。

2 階の窓際のカウンター席。正面のビルにダンススタジオが見えるが、人の動いている気配はない。階下の靴屋にも客らしき姿は見えない。隣の弁当屋だけは、昼食時をとくに過ぎているのに、人の出入りがある。今も、黄色のブラウスにジーンズの中年女性が、柴犬を外で待たせて店に入ってしまった。

この店に来たのは、長嶋茂雄の死去を知らせる一般紙からスポーツ紙まで各社の追悼記事を読むためだ。当初、図書館に向かったのだが、新聞雑誌コーナーの椅子は年配の男たち（女性も 2 人いた）でいっぱい、新聞を広げながらも一紙を膝の上に確保している欲の深い人物もいた。急かすような視線を送りながら順番待ちをしているのも億劫なので、新聞のそろっているコメダ珈琲店に来たというわけだ。

「ミスタープロ野球・長嶋茂雄さん死去、89 歳」が読売、朝日、毎日、東京などの一般紙の見出しだが、スポーツ紙は「長嶋茂雄は永久に不滅です、ミスタープロ野球死去」（『スポーツ報知』）とさすがに華々しい。しかし、長嶋茂雄の現役時代を知る者は、今や全国民のせいぜい 2 割ほどに過ぎないであろうから、「時代を照らした太陽」（「評伝」『朝日新聞』）の見出しに気持ちを重ねる人は、多いとは言い難いであろう。

長嶋茂雄が選手として引退し、監督としても退任してしまうとアンチ巨人になるファンたちが少なからずいたが、どちらかと言えば私もその一人だった。というか、幼馴染の T 君と同じく、巨人は負けて、長嶋一人が活躍する試合を期待している傾向もあった。

長嶋がプロ野球デビューをした年、私は小学六年生だった。それ以前は、プロ野球よりも六大学野球のほうがはるかに人気で、新聞の扱いも大きく、ラジオの実況放送もあった。クラスメートと下校の途中、蕎麦屋の前を通りかかると、出前運びのお兄さんによくつかまって、「おい、みんな、今度はどこが優勝と思うか？」と野球論議に付き合わされた。お兄さんは立教の長島（当時の表記は「島」）と杉浦、本屋敷の大ファンで、「そろそろリーグ優勝の順番は、東大だと思う」などと私が冗談で答えると、本気で怒りだした。

六大学野球の大スターだった長嶋が巨人に入団すると、ファンの関心もまた大挙してプロ野球へと移った。誰もが指摘するように長嶋伝説とプロ野球の隆盛とは不可分であったのみならず、ラジオから白黒テレビ、カラーテレビへのメディアの伸展、そして日本経済の高度成長期の夢が一体となり、政治的激動も含め、沸き^{たぎ}る時代の熱気と同伴し続けたヒーローなのであった。

私の少年時代、長嶋茂雄の存在が暴力沙汰を回避する便法となったことも少なからずある。杉並の福祉施設（〈ホーム〉と呼んでいた）での上は高校生から下は小学生までの乱暴で勝手気ままな少年たちの行動、荒くれどもとの諍いといった生活のなかで、危うい事態に及びそうな気配を察したとき、タイミングを見計らって、「きのうの長嶋のライトへの流し打ち、うまかったね、二塁打にしちゃうんだから」とか言えば、誰もが一挙に長嶋の話題に吸い寄せられて、苛めと争いの危機は遣り過ごされる。

〈ホーム〉の居住者に、母親が後樂園遊園地の用務員として働いている兄弟がいて、ときどき後樂園球場の優待チケットを入手すると、勇んで観戦に出かけていた。羨ましいことこの上ないのだが、後で臨場感あふれる長嶋の活躍ぶりを詳しく聞く楽しみもあった。この話を中学校の教室で、あたかも自分が試合を観てきたかのように身振り手振りを交えて伝えると、大勢のクラスメートが寄ってきて（女の子もいた）一身に関心を集めた。しかしあるとき、波乱のゲーム展開を、別の試合とまぜこぜに調子づいて報告していると、生徒会委員のY君に、「えっ、どういうこと？ その日の試合、雨で中止だったじゃないか」と詰問され、しどろもどろで取り繕うようなこともあった。しかし、こうして記憶を辿り出すときりがない……。

10日ほどたち、追悼文が出そろって一通り読んでみたが、蓮實重彦の「長嶋茂雄さんを悼む」（『朝日新聞』6月13日朝刊）が、哀惜の回顧的熱量において卓抜な一文だった。〈「ミスタープロ野球」何という冒瀆！〉という見出しが大書されている。ある日刊紙（実際は、ほぼすべての新聞）の一面に躍るヘッドラインを痛罵し、「何という事実の歪曲！」と記す。蓮實重彦は、長嶋茂雄と同年生まれの89歳、長嶋は巨人軍に華々しく入団する前に、「すでに東京六大学リーグの選手時代から、神宮球場のスーパースターだった」のであり、「どうして、マスメディアはその厳粛な事実を無視できるのか」と記す。蓮實は東京大学に入学後、たびたび神宮球場で対立教戦を観戦し、三塁側の最前列から、千葉県佐倉出身の長嶋を「この千葉の山猿！」と罵倒したという。「何度目かの大声に振り向いた長嶋選手と、ふと視線が交わった（ように思う）」とか、「まだ20歳になったばかりの私たちは、衆人環視のもと、たがいに瞳を交わしあうほどの特殊な仲だったのである」といった、まさしくこれは関係の感情的特化という意味でのメロドラマ的遭遇とも述べるべき、大いに羨望を喚起する、個人的な、あまりに個人的な経験だ。長嶋茂雄のサイン入り葡萄酒や松井秀喜のサイン・ボールの何やら特殊な入手の気配を漂わせる経緯は、「いまは述べておく」となれば、他人がおいそれと立ち入ることができない追懐の領域だ。

ようやく本題となる。長嶋茂雄はたぐいまれな詩人だったという自説だ。この話題は、詩人の野村喜和夫さんとのトークイベント「アフォリズム処方」（『週刊読書人』主催）で触れたものだ。野村さん自身、現今を代表するシュールリアリストなので、やんわりと挑発するもくろみもあった。しかし私のイレギュラー気味の主張を聞いた野村さんは、余裕の応答で意見を受け容れ、あげくは『長嶋茂雄詩集』刊行のまさしくシュールな、つまりは超現実的な企画の可能性にまで言及された。

話はまだ続く。3日ほどたった深夜1時過ぎ、月光が庭木の隙間から地下室に細く入り込んできた瞬間、何かしら気分の迷妄があったのかもしれない。就寝前は避けるべきなのに、メールの受信ボックスを開けてしまった。未読のものが一つあり、幻潮社（仮名）の編集部長から原稿の依頼が来ていた。オンラインでトークイベントを聞き、企画の示唆と刺戟を受けたという。

——『長嶋茂雄詩集』を急ぎ出版したいのです、ついては、序文を書いていただければ、とてもありがたく存じます、ぜひともお願い致します、締め切りは2週間後、分量は任意です、あわただしいお願いで申し訳ありません。

たちまち眠気は去った。またもや月の光にたぶらかされているのか、そう疑いつつも、私は夜を徹してエッセイめいた序文を記した。以下が、全文である。

＊

シュールリアリスト詩人 長嶋茂雄賛

長嶋茂雄はたぐいまれなシュールリアリズム詩人である。

長嶋は試合を控えて家を出る前、気持ちを落ち着かせるために、よくモーツァルトの曲を聞いたという。また美術鑑賞も好きで、ピカソ展に同行した元球団マネージャーが証言しているのだが、「このピカソの青の時代にはね……」と解説までしたという。しかし、詩人長嶋茂雄の存在は、こうした文化人的なエピソードをあえて引き寄せなければならない事実にあるのではない。まったく言葉そのものの次元、純言語的な境位において判断されるものののだ。

亡くなった後、多くの新聞・雑誌の回顧特集に、長嶋茂雄の意味不明の迷言が、しばしば思考回路の短絡を示す笑いのネタとして引き合いに出された。たとえば、「私も人生で初めて還暦を迎えました」とか。何度も還暦を迎える者はいないのだから、ごく一般的な意味のレベルで言えば、この「初めて」という副詞が誤用というわけだ。しかし、おそらく長嶋は「はじめて」を「ようやく」「やっと」の意味で使っている。ちなみに、『日本国語大辞典』によれば、12世紀の『今昔物語』に「ようやく」の字義を持つ古例がある。長嶋茂雄は、はからずも千年をまたぐ日本語との交感をはたしている、と言いたいところだが、一般的ないしは辞書的な言葉の運用に馴化させるような擁護は、シュールリアリストにふさわしくない。言葉が意味伝達の円滑で透明な道具と考えている人を途惑わせることこそが、詩的言語の働きのはずであろうから。

「ファーストはネクストのマザーなのだ」。「ジャイアンツの監督は、大変なんです。何しろ毎日がジャイアンツ戦ですから」。「私の職業は長嶋茂雄です」。「サバという漢字は、魚へんにブルーですね」。

こうしていくつかの例を挙げてみれば、措辞の屈折はユーモラスな偏差を見せている。ならば、次の例はどのように考えるべきなのか。

「勝負なんて家に帰って、風呂に入るまでわかりません」

耳にしたとたん、笑いを誘う。文法的には間違っていないが、事実の論理性から、意味として振れた表現というわけだ。表現レベルでみれば、そうかもしれない。表現形式（シニフィアン）と表現内容（シニフィエ）が、ズレを生じているのであるから。しかし、まさしくこの形式と内容のズレという言語的現実こそが、あらゆる比喻表現の基底を成すものであり（「君は温かいキツネだね、僕は冷たいタヌキだ」とか）、詩の言葉の生成する先鋭な場に他ならない。

試合の結果など、球場で決着がついているはずだ。ゲームの規則は逸脱するはずもない、と考えるのは、ありふれた凡人たち。ところが長嶋茂雄にとっては、試合が終わっても、帰途についても、勝

負のけりがついていないのだ。あそこで盗塁のサインを出せば、次の二塁打で一点入り、勝ち越していたかもしれない。中盤の勝負どころ、相手投手の荒れ球を考えれば、もう一球待ってから、バントの指示を出せばよかった。そうしたゲームをめぐる内面のドラマがいつまでも継続する。終わりを迎えるのは、家に帰って湯船につかり、ようやく気を鎮めたときなのだ。

どういうことか？ あり得た、あったかもしれない、あるべき勝負の複数的な可能性が持続している。「勝負なんて家に帰って……」の表現に伏在しているのは、そうした〈可能的推量〉なのだ。この〈可能的推量〉こそ、記憶を探り、思いを引き寄せ、想像力を起動させる。結果として、言葉は歪み、軋み、逸脱する。そこでは、シュールリアリスティックな表現の偶成は必然的な事態なのである。

湯船に入ってようやく〈可能的推量〉のゲームは静かな落ち着きを得るのだが、実際の試合から自宅の風呂場にいたるまで、心身の運動性をめぐるドラマにはさまざまな動と静の起伏があるはずだ。私が仮に〈文学〉と呼ぶ、言葉との取り組みの軌跡と重なり合うことは言うまでもない。

シュールリアリスト詩人・長嶋茂雄を語るのであれば、次の言葉にも触れておくべきであろう。

「球がスッと来るだろう。グッと構えて腰をガツとする。あとはバアッといってガーンと打つんだ」

少年野球教室での実践指導の言葉である。子どもたちが、この表現をどれほど具体的に理解できたかは措くとして、身振り手振りでバッティングを教える長嶋茂雄の声、動き、息づかい、風の気配、グラウンドの土の匂いまで、豊かに五感を刺戟する感応性に満ちた表現だ。独特なオノマトペを駆使して身体の躍動を伝える長嶋の表現は比類ないもので、この音感まさにシュールリアリストのものと云ってよい。しかも意識的な言語操作によるものではない。無意識過剰の特権的な振る舞いなのだ。

オノマトペ表現に長けた詩人は、宮澤賢治や草野心平がそうであるように、宇宙と自然の消息に通じた人である。長嶋茂雄もまたそうであった、と言いたいところであるが、2004年3月、持病の心房細動によって生じた血栓が脳の血流を止め、一命を取り留めたものの半身不随となった。以後、残念ながら、この破格の言葉の使い手は発話機能を失った。

しかし、この稀有な野球選手の主戦場は言うまでもなくフィールドにあったのであり、そこでは紛れもなく野球の文法規範を逸脱するかのようなパフォーマンスを展開した。空振りしたときに、派手にヘルメットが飛ぶように工夫したり、ワンバウンドの球でもホームランを狙ったり、一塁へのランニング・スローに歌舞伎の手の所作を取り入れたり、ショートの手配範囲を侵犯して球を捕りにいたり、勝負を避けた敬遠に抗議してバットを持たずにボックスに立ったり（それでも四球で歩かされた）、審判にバンドの仕草をしながら代打を告げ、作戦を相手に教えたり……。しばしばその言動は野球の範例や現実原則をふみこえたシュールリアリズムの体現者だったのである。

さらに私には、選手としての長嶋茂雄に見果てぬ夢があった。たとえば、オールスターゲームの最終打席、左中間の奥深くへヒットを打った瞬間、球宴の締めくくりとして、何を思ったのか一塁ではなく、猛然と三塁に走り出し、逆方向の走塁で二塁打にするというものだ。長嶋茂雄はこわばった野球ルールを転覆させてしまう。翌年以降、日本プロ野球は三塁からダイヤモンドを回っても良いことになったのである……。

＊

以上の原稿を送ってから1週間経過したが、幻潮社の編集部から何の返信もない。一昨日、確認の

メールを出したのだが、事態は変わらない。そして、先ほど不可解な思いで受信ボックスを再確認したところ、当初の原稿依頼のメールがどこにも見当たらない。錯覚だったのか？ そうだとすれば、どの段階なのだろう。いずれにせよ、『長嶋茂雄詩集』の企画が幻だとすれば、「序文」もまたその片影に過ぎないことになる。せめてここに私説として記しておく。

失われた作品を求めて

長嶋茂雄が現役を引退した1975年10月5日、私はテレビ中継で最終試合とそれに続くセレモニーを見ていたのだったが、気分は落ち着かなかった。翌日に文学界新人賞の選考会が控えていたからだ。初めて応募した小説「出会いの森」が候補作になっていたが、長嶋引退の惜別の感情が、新人賞に落選した虚脱感を先取りし、何かしら終わりの感覚のようなものとして一体となり、身に貼り付いていたのだ。いや、逆の気分も交錯していた。一つの終りと始まりの交点にあって、自分は新たな出発を迎えるはずで、吉報が届くはずだ、と。あえて楽観的な見通しに身を寄せていくことで、意気をためていたのだ。このような心境をあらかじめ用意するとしばしば裏目に出る。結果、そのとおりに落選となった。自分で自分の思いと駆け引きをしてしまうと呪縛から抜け出せなくなる。

しかし、ここで私が述べたいことはそうした感情のステージのことではない。きわめて素朴な事実——記憶と忘却のジレンマの問題だ。どういうことか？ 応募した作品の写しがどこにもないのである。当時は、いちいちコピーなどしなかった。下書きをしたノートはあったはずだが、度重なる転居で失くしてしまった。もとより私の悪習で、いったん書いた原稿類、掲載紙などを整理はおろか保管もせず、雑然と積み重なる紙類のなかに放置し、ある日丸ごと唐突に処分する。

「出会いの森」はどのような小説であったか？ 誰よりも作者の私が知りたい。理由は定かではないし、今更ながらの願いだ。記憶を復元しようとして、ある喫茶店に向かった。

東京・雑司ヶ谷の「キアズマ珈琲」。いつもは池袋からの徒歩なのだが、この日は山手線・大塚駅から都電荒川線・鬼子母神前で下車して訪れた。鬼子母神の境内に通じるケヤキ並木沿いの古い長屋でひっそりと店を開いている。入居している建物は有形文化財として登録されている並木ハウス別館、裏手にはかつて手塚治虫が住んでいた。

一人の場合、狭い店なのでカウンター席に座るのだが、珍しくすいていて、急な階段を上って窓側の席を選んだ。元は浴室だったらしい反対側の奥の場所も赤い壁と緑色のソファの対比が面白いスペースなのだが、やはり一人で座り込むのは気がひける。そうした雑念がふくらむと読むことも書くこともできない。

窓から柔らかな光が入ってくるが、曇天で雨を予感させる。夕焼けは望めないかもしれない。

コーヒーはどうするか？ 少し迷って、「適度な酸味と豊かなコク、さわやかな香りが特徴」と案内にあるコスタリカ・コーラルマウンテンに決める。

ほどよい酸味を味わいながら一息つき、「出会いの森」の復元に取りかかる。復元といっても文体は再現できない。物語のあらましを辿るだけだ。それでも困難を覚えるのは、落選のトラウマを意図的に小さくする忘却の心理が働いたせいかもしれない。いや、それほど大仰な身構えなどなかったはずだ。むしろ、応募作程度の小説などいつでも書けると、ほとんど人生を営めてかかるに等しい、小説制作への大きな錯誤があったのだ。

「想像力とは、無限の細部に書き込みを行なう能力である」とはベンヤミンの言葉だ。これは記憶

を甦らせる力にも当てはまるのではないか。「記憶力とは、無限の細部を甦らせる能力である」とか。細部から細部へ連鎖的に呼び起こされていくプロセスを迎えたいのかもしれない。

「出会いの森」の場合、記憶に潜むどのような細部が感応的刺戟をもたらすのか。

新宿西口超高層ビル街——ここは私の創作の想像的磁場とも言うべき場所で、京王プラザホテル喫茶のカップの水に富士山の姿が浮かびあがったり、生者と亡者が入り交じりながら、森に変貌した超高層ビル街でハイキングをしたりする。どうやら、この場所の設定が「出会いの森」の記憶の入口になりそうだ。

京王線・新宿駅北口改札から地下広場へ抜ける通路に、かつて手荷物一時預所があった。(コインロッカーが普及する以前は各駅で見られたが、今でも残っているのは東京駅新幹線改札口近くの手荷物預所くらいだ)。超高層ビル街に続く短い路地のような場所である。

ある日、幽鬼のような不安定な姿勢で手荷物預所へ近づいていく、20歳の青年Kの姿があった。Kに定職はなく、調布市・仙川の榮太樓本舗で羊羹造りのアルバイトをしているが、煮上がった小豆に砂糖を投入するとき、ボイラーが誤作動して左腕に火傷を負った。たいした負傷ではなかったが、それを口実に仕事を休んで2日目のことだった。

Kは気弱な声で受付係の初老の男に言う。

すみません、預けたいものがあるんですが。

はい、では荷物をここにおいてください。

あの一、荷物はヒトなんです。無理ですか？

けっこうですが、人間となれば特別料金になりますよ、それでよければ。ただし、お子さまはお断りしています。

よかった、ではお願いします。

で、お荷物は？

あの一、私自身なんですが、どうでしょう。

ご本人の場合は、さらに料金が5割ほど加算されますが、いいですか。先払いです。3日限定での預かりになります。何しろ扱いの面倒な生ものですから。それを過ぎると杉並の高井戸焼却場で処分となります。

素晴らしいシステムですね。安心しました。

で、どなたが受け取りに来ますか？

えっ、すいません。考えていませんでした。そうか、どうしよう。えーと、やっぱり本人が受け取りに来ると思います。そうしておいてください。

いいですよ。その代り、本人が本人であるという何か証明できるものを必ず見せてください。間違っただと後で面倒で、上の方からひどく叱られてしまうんで。では、ここにサインをお願いします。はい、では、こちらへどうぞ。

Kが置かれた場所は、中央のやや右、下から3段目の棚だった。頭が突っかかる気がしたが、膝を折りたんで坐る姿勢をとると、ほどよい居心地に収まった。足を奥に伸ばせば寝そべることもできた。受付越しに、通路の左隅から西口地下広場を行き交う人々が見える。ただ、なぜか雑踏の音は聞こえず、無音の景色のなかで人が動く。足取りは早送りのコマのようにぎこちない。

いつしか^{うたたね}転寝をしていて目を開くと、あたりは暗闇に包まれている。下の棚の方から、小さく呟きのような声が漏れたが、ことによると他にも仲間がいるのかもしれない。それとも気のせいだろうか。

確かめる前に、ふたたび眠りに落ちた。深い眠りのなかで、何度か明るみと暗闇が交替した印象があったが、それは昼夜の入れ替わりだったのだろうか。そうだとすれば、期限の3日を越えている可能性がある。

Kは棚を下り、念入りに足腰の屈伸運動をした後、受付に行ったが、係の男の姿がない。棚にも荷物が一つも残っていない。それどころか西口地下広場に木々が密集し、下草がまんべんなく生えている。クヌギ、ケヤキ、コナラなどが確認できるが、いかにも武蔵野の雑木林の広がりだった。下草に目を凝らすと、ホタルブクロ、ユリ、ハギ、オミナエシといった夏と秋の草花が混在し、季節が入り乱れている。木立の間に踏みしだかれた細道がまっすぐ奥へと延びている。

Kに驚きはなかった。むしろ驚きがないことが驚きだったと言うべきだろう。ただ、首筋のあたりに重く固い異物が巻き付いているような身の不快感があった。

外に出て、地下広場に足を踏み入れたとたん、森は消え去り、いきよに場面が切り替わって、いつものとおりの雑踏で、人々がせわしく動き回っている。ざわめきが膨らみ、縮み、渦を巻き、小さくなったかと思うとまた膨らみ、潮となって地下街を行き交う。Kはどこか静かな場所に移動して気持ち落ち着けようと思った。おかしいことに、まだ空腹は覚えない。腹を空かせないのは死んだ人間だ、と不吉な想念が脳裏をよぎり、慌てて声に出して打ち消した。

Kはどこにいったのか、肝心なのは、この先であったはずだ。気分がゆるみ、記憶力が途切れてしまった。

階下から、コーヒー豆を焙煎する匂いがのぼってきた。店主は焙煎の前後に丁寧なハンドピッキングをする。ハンドピッキングとは、コーヒーの味を阻害する豆を手作業で取り除くことである。厳しい選別の結果、仕入れ時に比べ大幅に量を減らしてしまうこともある。先と同じく、コスタリカを追加注文した。

はたしてKはどこに向かったのか、私は遙かな地平線に目を凝らし、遠くの山並みを渡る風の音に耳を澄ますように記憶を追う。すると思わぬ細部が記憶の端子となって、「出合いの森」が動き出した。それは何か？ コーヒーカップとジャイアンツのYとGが重なったロゴタイプである。

Kはデパートの屋上庭園に行くことにした。伊勢丹か、京王か、小田急か、どこのデパートを想定して書いたのか、もはや定かではない。静かな庭園を期待して来たものの、Kの勘違いで、屋上遊園地になっている。端の方にだけ、ひっそりした一角があり、「メモリアル・アート」という案内板の置かれた墓石業者の出店で、黒御影石を中心に見本が鈍い光沢を浮かべていた。

象の長い鼻が滑り台になっていて、頭から滑ることを繰り返している5歳くらいの女の子が遊んでいるが、平日の午後、人の姿はまばらだった。Kの座るベンチの正面はおだやかに回転するコーヒーカップの乗り物で、それも苦しいモーター音を響かせていた。コーヒーカップは、起伏のある不規則な回転をとめないながら周回する。

カップを目で追っていると、Kは小学校中学年くらいの少年の動きが気になりだした。野球帽を^{まぶか}目深にかぶっていて、表情はわからないのだが、右腕を銃で狙いをつけるかのような恰好で、顔の近くに引き寄せている。周回のたびに、銃撃の的を変えているらしい。

自動販売機、おとし電車、象の滑り台、ゴーカート……、何度目の周回のときだったか、少年の腕が自分に向けられていることに、Kは気づいた。同時に野球帽のロゴがジャイアンツであったので、彼は親近感を覚え、手を小さく振り、微笑みを返した。

ふたたび一周してきたとき、黒い銃口と視線が合った。なぜ自分を狙うのか、と問いかける間もな

く弾丸が額に命中した。頭蓋骨全体が跳ね上がるような激しい衝撃とともに、視界は消滅し暗闇が訪れた。

ここまで「出会いの森」の記憶を辿ったとき、タイトルの意味に結び付くシーンがどこかにあった気がしたもの、思い出せない。K が少年時代を回想する章も挿入されていたはずだ。

コーヒー店を出てケヤキ並木の参道から鬼子母神を抜け、明治通りに入ったとき、雨が降り出した。リュックには重々しく本が詰まっているが、一冊も読まないままに終わった。

大粒の雨が道に跳ね、足元に降りかかる。いつもなら日没の始まるころだ。代わりに夕暮れの一句を残しておきたい。

夕焼けや鞆の底の「オイディプス」

(角南範子『薄青き^{ひる}午』)

執筆者について――

中村邦生（なかむらくに お） 1946 年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』（2009 年）、『転落譚』（2011 年）、『幽明譚』、『[ブラック・ノート抄](#)』（いずれも 2022 年）、『[変声譚](#)』（2024 年）などが、批評には、『未完の小島信夫』（共著、2009 年）がある。